

①どのような問題か	②なぜその問題を提起するのか（その問題が重要である客観的理由）	③自分なりの解答	④そう解答する根拠	⑤教員の応答
山口教員は授業中平井教員が私たちにプレゼンテーションをし終わった後「ご苦労様です」とおっしゃっていた。この言葉遣いは間違っている。	ご苦労様は目上の人が目下の人に使う言葉であり、社会に出ている教員が、また、大学卒業後は社会人となる学生を前にしている教員がこのような言葉づかいでは一人の社会人として示しが見つからないし、学生からの信頼を失うことになるから。	お疲れさまです。	ビジネスマナーの一つの基準とされる秘書検定では、目上の人から目下の人には「ご苦労様です」、目下の人から目上の人には「お疲れ様です」となっている。	「お疲れ様です」という言葉は、私が学生の時にはほとんど使われていませんでした。疲れていないのに「お疲れ様」というのには違和感があります。それから、平井先生は同僚なので、「目上の人」というわけではありません。
レポートの書き方で思う、考えるを使っはいけない。	レポートを書くにあたって、思うや考えるを使えないため文末が毎回同じになってしまい奥行きのある文章を作ることができない。	思うや考えるという言葉は使ってもいいと思う。	論理的に根拠づけられるのなら自分の考えを思うや考えるという言葉を使って述べてもいいと思う。実際に思う、考えるを使っても説得力のある文章を本などで目にしたことがある。根拠のある文章を書くうえで使う言葉は問題ではないのではないだろうか。	「思う、考えるを使っても説得力のある文章」というのはあるかもしれませんが、それはたとえいうなら、「プロ野球選手が変化球も使っているから、自分も使ってよい」というのと同じような理屈です。初心者、初学者は、まずは基本を練習すべきです。「思う」を使っはいけない理由については、『コビペと言われなレポートの書き方教室』（61ページ〜）をよく読んで理解してください。
語尾に考える。印象をうけた。思う。を付けてはいけないということだったが、つけてもよいのではないか。	思う。や考える。の後の文に根拠や理由がないのであれば問題だが、きちんと付け加えればよい。	思うや考えるは使ってもよい。	その後に根拠や理由を書けばいいから。「思う。」を使えば単なる感想になってしまうと指摘されそうだが、感想と意見は紙一重であり、それらを禁句としてしまえば自分なりの意見は書けなくなってしまう。自分の意見を相手に伝えることが出来たらいいのだから、縛りは必要ないだろう。	「自分なりの意見」は、「あなたが頭の中で思ったこと」ではありません。授業中、何度も言いましたが、「考える」とは、「調べ、知り、書き、書き直す」という反復作業のことです。「思い」を伝えるのが必要な場面もありますが、この授業では、「民主主義社会を支えるために必要不可欠なスキル」として、「自分が正しいと判断したこと」を伝え、意見を異にする他者と合意形成することを目的としています。
「思う」「感じる」「考える」問題について。	納得できないから。	「思う」「感じる」「考える」は使ってもいい。	その単語がないと文的におかしくなってしまうことがよくあった。使いすぎるのもよくないが使ってもよいとおもう。	納得できない理由を示してください。「「思う」と書かないと文的におかしくなる」のは、おそらく、理由を書かずにごまかしているからです。
なぜ客観的な根拠のある、論理的な主張を重要視するのか。	総合科学入門講座では、授業の後に毎回必ず授業に対するコメントを書くが、単なる感想ではなく、客観的な根拠のある、論理的な主張になるよう意識していたから。	大学では、レポートや論文を書く機会が増える。そもそも論文とは、誰かに何かの理論や理屈を説明するために用いられ、筋道を立てて述べた文である必要がある。毎回の授業コメントを書くことによって、説得力のある文章を書く能力を身に付け、論理的思考力を養成するため。	総合科学入門講座の第一回目に取り上げられ、技術を身に付けるには反復練習が大切であるということを学んだから。	「根拠づけて主張する力」「多面的に考える力」は、すぐには身につけません。これからも「反復練習」しましょう。後期「課題発見ゼミ」で待っています。
レポートの書き方の説明の際にウィキペディアを使っても良いが、その後正確な情報がある論文などを読み調べるのが良いという趣旨の話がされていたが、最初にウィキペディアは、嘘が多いなどの悪い情報を生徒に与えずぎている。	高校生から大学生になったばかりの学生にいきなり論文を読めと言っても抵抗が強い。そこで、ウィキペディアから取りかかるとなれば、抵抗が少ない。そしてそこから、論文を読むという流れで進める。しかし、ウィキペディアを悪くいうあまり、ウィキペディアを使っはいけないと勘違いしている学生が多いことが問題。	私はウィキペディアで情報を仕入れ、そこで興味を持ったことの論文を読むという流れで作業をしているため、レポートの課題の際も提出期限に余裕を持って行動ができています。しかし、ウィキペディアを使っはいけないと勘違いしている私の友人達は、論文を読むという作業に取り掛かるまでに時間をかけすぎておりレポートの提出がギリギリである。レポートの書き方指導の際に、ウィキペディアを使うのが禁止ではないということをもう少し強調して話をする必要がある。	私は4の根拠として作業効率を挙げる。この例を一つ挙げる。交通事故の原因についてのレポートを書くとする。私ならば、交通事故の原因をウィキペディアで見た後にそこに書かれている内容で興味を持ったことを論文で探す。しかし、ウィキペディアを使っはいけないと勘違いしている学生の場合は、交通事故の原因で検索をし、自分が興味を持った内容を探すことに時間がかかる。その結果論文を読む作業に入るのが遅れる。そして論文を詳しく読む時間がなくなり内容が薄いレポートが完成する。最終的に論文を読むということ作業をするのであれば、そこに至るまでの時間をいかに短くできるかが良いレポートを作る鍵である。	『コビペと言われなレポート』29ページ、「ネット情報はきっかけとして利用する」のところを、友人たちにも読ませてあげてください。
最後まで授業の意図が明確に分からなかった。	総合科学部生にとっては必修の授業。多くの学生が単位を取るために講義を聞きに来ていた。しかし、授業を聞いていない学生が多くいた。それでは、有益な情報を得る絶好の機会を逃してしまう。	来年度入学の学生には是非とも、興味をひいてもらえる授業を展開していただきたいです。	私がこの授業を受けて、何が得られたか良く分からないから。	「何が得られたか分からない」とのこと。大変残念です。これまでに何度も繰り返して言いましたが、この授業の目的は、「根拠づけて主張する技術」と「多面的に考える技術」を身につけることです。そのために、初回には「レポートの書き方」を講義し、それから毎回、授業コメントとして小文を書く練習を繰り返し、最後にレポートを書いてもらっています。具体的な授業の内容は、上記二つの目的と関連した事柄を取り上げるようにしています。
どうして刑法犯罪認知数など社会的問題の、難しいポイントに目を向けようと思ったのか。	どうして、どのようにして社会問題に対しての疑問を持ったかという過程を知ることによってこれから私も今以上に社会問題に目を向けるチャンスがふえるのではないかと考えるから。	社会的問題に興味があるから。また、社会的状況を把握することによって自分なりの見識など生きていくための知識を身につけられるから。	山口先生は意見など論述を行うときは根拠づけていかなければならないと仰っているから。	質問のポイントがよく分かりませんが、どうして刑法犯の認知件数の推移を問題に出したかという理由は、「統計データ」を読み解く力を練習する素材として適切だと考えたからです。

<p>今の論文を書く規則はどの時代で、どこで生まれたか。(特に出典に関する規則)</p>	<p>いろいろなことは必ず発展の過程がある。この規則は現代大学の勉強に対する不可欠なものである。昔の論文から見ると、この規則がなかったそうだ。この規則の誕生と大学は現代大学になった大きな関係があると思う。</p>	<p>私はこの規則は現代の学術雑誌の関係だと思う。</p>	<p>現代の学術雑誌は今の研究者と昔の研究者の研究の結果を発表する時最大の差別である。論文を書く規則も発表に関するものだ、そのために、私は規則の誕生と現代の学術雑誌の誕生が関係あると思う。</p>	<p>これは歴史的事実の問題ですから、あなたが「思ったこと」ことを仮説として、実際に調べてみましょう。</p>
<p>小学校英語教育必修化は必要か否か</p>	<p>今回の授業でもあった大学生になり長期もしくは短期留学に向かう機会があるなかで英語を学ぶ時期について考え直すため。</p>	<p>小学校英語教育必修化は不要であると考える。</p>	<p>小学校において授業を受けるにあたって、「静かに先生の話聞く」事が当然である。ところが小学校の英語において教員はゲームや歌などを積極的に勧める全員がそう行うことはできず、中には自分ではできないと思ひ込む子すら出てくる。これは日本人のおとなしく落ち着いている子供がいい子とされ、英語圏特にアメリカなどでは活発に会話するという文化の違いが原因である。賛成派の隣の国の中国や韓国では既に小学校英語必修化を導入し、成績が向上しているために日本もそれに習うべきとあるが、同じ東アジアでも日本人と彼らの国民性は異なるので日本には適応すべきではない。 他にも早くから学ばせることで熟練スピードが上がるなどの賛成派の意見があるが、実際に福沢諭吉や國弘正雄さんや村松増美さんなど中学教育段階やさらに年齢を重ねてから英語学習を開始し、結果堪能な英語能力を身につけた人物は多くいる。もちろん彼らが特別というわけではない。彼らに共通してきているのは自主的に継続的に学習したことである。第二言語の習得というのは、日常的に使用しない限り継続的な学習が不可欠である。その自主的な継続的な学習は小学生のうちから強制的に行うのは時期的に無理があるといえる。 以上から私は小学校英語教育必修化は不要であると考える。</p>	<p>英語の教育法を学んでいない小学校の先生に、英語教育をやらせようという発想にも無理がありますね。私も、小学校での英語教育の必修化には懐疑的です(山口)。</p>